

研究ノート

附属認定子ども園行事に授業参加する学生の教育効果について — 「おまつり広場」をとおしての学び —

丹羽ヤエ子¹, 池田 舞²

(西九州大学短期大学部 幼児保育学科¹, 西九州大学子ども学部子ども学科3年²)

(平成23年12月22日受理)

About the education effect of the student who does lesson participation at an attached authorization child garden event — Learning pushed in a "festival open space" —

Yaeko NIWA¹, Mai IKEDA²

(¹) *Department of Early Childhood Education and Care, Nishikyushu University Junior Collage*

(²) *Department of Children's Studies, Faculty of Children's Studies, Nishikyushu University*)

(Accepted December 22, 2011)

Abstract

In this research, questionnaires were set out to the students who attended Festival Yard (Omaturi Hiroba) for three years, and the results were considered in relation to the educational learning effects. As the results, the followings affairs were clarified.

- (1) The high childcare practice was observed in the event, which is different from the usual practice.
- (2) The same field, the same time, the same space and the same circumstance were occupied with people whose ages were from zero to eighty years old.
- (3) This practice was not evaluated although usual practice was. Then, the participation with relaxations and funs made the observation expand.

From the above results, the comprehensions to early children and child care-workers were cultivated further more.

Key word : Observation 観察
It studies each other 学び合い
Small-child understanding 幼児理解
Childcare person understanding 保育者理解

1、緒 言

本学幼児保育学科では、将来、幼稚園や保育所、福祉施設において、保育の専門的知識・技術を基盤として乳幼児の保育及び保護者に対する支援等を行うことができる保育者を育成するため、本学独自のアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの「3つのポリシー」を掲げ、学生を受け入れることを基本方針としている。

特にアドミッションポリシーでは、①他者（特に子ども）との交流に積極的であり、且つ共感することが出来る人、②ボランティア活動や職業体験に積極的に参加した経験を有する人、③自己の多様な体験を振り返り、それを表現・省察することが出来る人である。

幼児保育学科では2つの基礎資格（保育士資格および幼稚園教諭二種免許状）に加えて、それぞれの専門性をさらに高めるために、学内外での豊富な実習と学科の特色として（「表現・音楽コース」、「心理・環境コース」）の2つのコースが設けられている。

コースには指定科目を設け、「表現・音楽コース」では器楽表現・幼児ダンス・歌唱表現・総合表現があり、毎年12月に文化会館においてコースの集大成である実技発表会を実施している^{注1)}。附属の認定子ども園の園児たちや西九州大学子ども学部の学生などの賛助出演もある。また「心理・環境コース」の指定科目は、こどもの遊び・こどもと自然・保育カウンセリングがあり、こどもと自然では2泊3日の北山少年自然の家宿泊研修を実施し、自然体験をしている。また、保育カウンセリングの授業においては、子育て支援「親子いきいき広場」^{注2)}を実施し、地域の親子との交流の場を設けている。2年間の保育者養成において、保育実践力をいかにして培っていくのが大きな課題でもある。

豊田（2011）¹⁾は「岡山大学：大学コンソーシアムによる幼稚園教員養成のなかで、保育者に求められるものとして、「教職に対する強い情熱」「総合的な人間力」など不易のものと幼児教育の専門性・特別支援教育・子育て支援など多様化した「専門性と実践力の獲得」など最新の専門的知識や指導技術等を身に付けることが、これまで以上に強く求められると述べている」といっている。

本研究では、上記の基本方針等に基づき、本学の認定子ども園（附属幼稚園・附属保育園は平成19年4月認可を受けてスタート）の一大イベントである「おまつり広場」に焦点をあて、筆者が引率し、本学学生が授業の一環として参加した、平成20年度から平成22年度までの3年間のアンケート紙調査を元に、学生の幼児理解や保育士及び幼稚園教諭理解への教育効果（学び）について考察する。また、正規実習と授業の一環として行事参加した「おまつり広場」の学生の学びについて比較検討

する。

2、おまつり広場の概要

2.1 「おまつり広場」とは

認定子ども園行事の一つである「おまつり広場」は、毎年10月に実施されている。

「おまつり広場」は、日常の保育の中で、子どもたちの身近にあるリサイクル素材（ペットボトル、トレー、空き箱など）を利用した作品や、毎日行っているモンテッソーリ活動の中で作った手作りの作品を使って、お買い物やゲームを楽しみながら多くの生活体験をする「ごっこ遊び」である。

「ねらい」は、①イメージを膨らませながら工夫してものづくりを楽しむ、②友だちと協力してダイナミックなごっこ遊びを展開する、③リサイクルを通して、物の大切さを知る等であり、年度によりテーマやねらいも異なる。

2.2 行事参加者

この行事では、幼稚園児・保育園児で450名前後、本学短期大学学生、本学エルダーカレッジ生（50代～80代の方28名弱）、平成22年度は大学こども学部学生幼稚園実習参加と多様な年齢層の大人も参加し、相互に温かい触れ合いが出来る雰囲気がある。幼稚園と保育園は隣接し、園庭は共有スペースとなっている。

2.3 1日の流れと活動方法

当日の学生は8時30分集合、8時30分から各テントにてお店の責任者と打ち合わせ（店づくり手伝い・各テント待機）、園児係りはそれぞれの保育室へ、10時10分「おまつり広場」開始（お店の子どもたちの援助・お買い物するこどもの援助）、11時5分お買い物する子とお店屋さん係りが交代する。11時50分お買い物終了。12時まで「おまつり広場」の活動に参加し、その後、テントや机・椅子、道具類の片付けをし、13時過ぎに終了して本学にもどってくる。

2.4 学生参加の歴史と係りの種類

第1回の「おまつり広場」は昭和56年より開催され、31年余りの歴史があり現在に至っている。学生は平成17年度より平成19年度までボランティアとして参加し、平成20年度から平成22年度までは授業の一環として筆者が引率指導し、一限目から3限目まで参加した。

平成20年度は「表現・音楽コース」「心理・環境コース」の106名、平成21年度は「表現・音楽コース」「心理・環境コース」の73名、平成22年度は「表現・音楽コース」の34名で、この年は、大学の子ども学部より

幼稚園実習中であったため、幼稚園児係と着ぐるみ係りは実施していない。

お店は、①おもちゃ屋（クラスごとに活動中に作った手づくりのおもちゃ）、②おしゃれ店（子どもが作った手作りの小物＝年長児による刺繍布袋、バック、ネックレス等）、③ゲーム屋（子ども手作りのゲームセンター＝ヨーヨー釣り、ジャンケンゲーム、輪投げ、金魚すくい等）、④ジュース屋（バック入りのジュース＝オレンジ・アップル）レストランコーナーで、⑤たべもの屋（年長児手作りのクッキーやパン）、⑥乗り物屋（子どもたちの大好きな、絵本の中のキャラクターの乗り物によってカードにシールを集めていくスタンプラリー）、⑦抹茶屋（年長クラスは日頃の保育で裏千家の先生にお手前を習っている。当日は年長児がお茶とお菓子でおもてなしをする）、⑧小人の店（保育園の子ども達で作ったおもちゃや小物類）などがある。

このお店係りと、幼稚園児係り、保育園児係り、⑨お楽しみコーナー係り（学生のお店開きテント）、手遊び係り、着ぐるみ係りなどに分かれた。「お楽しみコーナー」屋さんでは、ペンダント・お花が笑ったのブレスレットを並べたが、学生1名に付き、ペンダント4個、ブレスレット4個の計8個を製作した。

2.5 「おまつり広場」のテーマ・ねらい・目的

毎年テーマや目的・ねらいが設けられている。テーマは平成20年度「お話大好き メルヘンの国へ出かけよう」、平成21年度は「ぼくらはみんな生きている!」、平成22年度は「みんなが作った宝物 大集合」であった。目的・ねらいは、①日常保育の中で、自分たちが作ったものや考えて描いた作品を使って遊ぶ楽しさを味わう。②友だちと協力して、ダイナミックなごっこ遊びを楽しむ。③イメージを膨らませながら工夫して物作りを楽しむ。④リサイクルを通して、物の大切さを知るなどであり、年度により若干変化する。

2.6 授業としての取り扱い

1年次後期（毎週木曜日3限目）展開の「乳児保育」の授業の一環として参加している。「おまつり広場」も毎年木曜日に実施されている。1・2限目の授業担当者は、「補講」または「おまつり広場参加を授業」のいずれかを選択している。

授業参加としての初年度は、附属幼稚園の主任より本学にて、授業の中で詳しい説明をしていただいた。特にお店屋さん担当は、（朝の時間）（活動中）（終了後）（その他）として詳細に指導指示がある。毎年筆者と現場担当者との打ち合わせは実施している。また、「おまつり広場」開催直前には、幼稚園・保育園共にオリエンテーションを実施している。

2.7 係りと人員

各係りの担当者数は次のとおりである。＜平成20年度＞幼稚園児係り11名、保育園児係り15名、お店屋さん係り26名、お楽しみコーナー（学生お店屋さん）と手遊び係りは兼務54名、欠席4名、合計106名、＜平成21年度＞幼稚園児係り14名、保育園児係り17名、お店屋さん係り25名、手遊び係り12名、着ぐるみ係り2名、欠席3名、合計70名、＜平成22年度＞幼稚園係り（子ども学部実習生担当）、保育園児係り8名、保育園児係りと手遊び係り兼務7名、お店屋さん係り19名、合計34名、着ぐるみ係り（子ども学部実習生）となっている。

3. 調査方法

3.1 調査対象者

平成20年度より平成22年度の3年間、本学幼児保育学科1年次生を対象とした。

＜平成20年度＞両コース、4クラス全員110名、＜平成21年度＞両コース、2クラス全員73名、＜平成22年度＞表現・音楽コース、Aクラス、34名を対称に記名式による質問紙調査を実施した。（回答率100%）

（質問紙は別資料参照）

3.2 調査内容・時期

「おまつり広場」参加直後の11月にアンケート紙調査によりデータを得た。質問内容は「はい」「どちらともいえない」「いいえ」の3段階評価と、自由記述とした。アンケート調査紙は平成20年度のみ学生テント「お楽しみコーナー屋」を出店した件の質問を加えたが、3年間ほぼ同じものである。

学生役割配分は「2.7」のとおりであるが、異なる点は、初年度に学生のお店屋「お楽しみコーナー」を出店したことと、平成22年度に子ども学部学生が附属幼稚園実習中であったことである。

4. 調査結果

4.1 質問紙について

質問紙の質問項目は、3段階評価とより詳細に学生の実態を把握するために自由記述形式も多く取り入れた。

4.2 結果と考察

図（グラフ）は年度毎に、係り別の割合と合計数値を示している。紙面の都合上、各年度の合計数値と3年間の平均数値を挙げていく。（図参照のこと）

(1) 「はい」「いいえ」の質問回答について

『質問1』おまつり広場に参加して、楽しい一日が過ごせましたか？

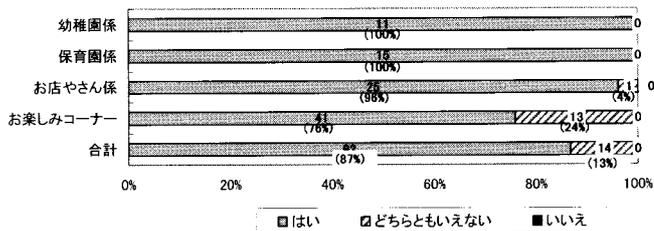


図1. 「おまつり広場に参加して楽しい一日が過ごせましたか？」
『平成20年度』106人

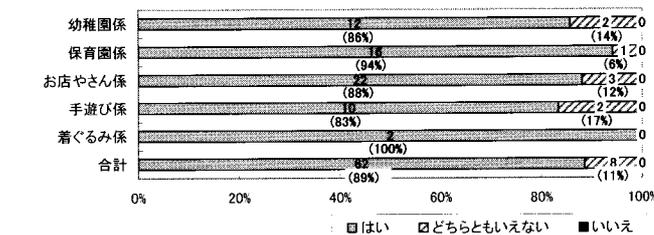


図2. 『平成21年度』70人

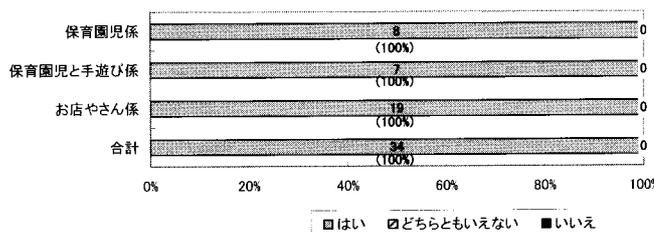


図3. 『平成22年度』34人

「はい」は20年度87%、21年度89%、22年度100%、3カ年平均は92%となっている。殆どの学生が楽しい一日を過ごしている。特に22年度においては、全ての係りにおいて100%で、全員が満足していた。小田、高橋(2009)²⁾ 小田(2011)³⁾ は、「参加観察することで感じた喜びで、学生の心を揺さぶる体験となったのだとすれば、半数以上のものがいれば意欲的な参加姿勢だったと評価できるだろう」としている。ほぼ100%に近い数値であり、「学生の喜び・楽しさ」の満足度は十分うかがい知ることができる。

保育者が保育をするにあたっては、筆者の長い現場体験から、保育者自身がまず楽しむことができれば、子どもと一緒に楽しむことができるものであり、保育効果をあげるための重要な要素であると言えると思う。

『質問2』自分の与えられた役割(仕事)はしっかり果たせましたか？

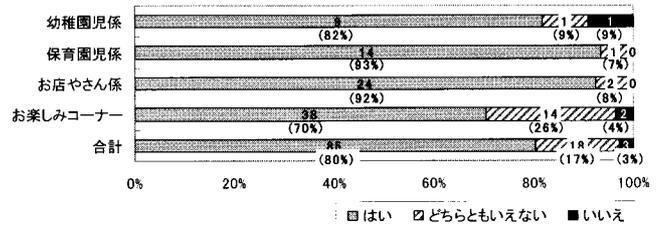


図4. 「自分の与えられた役割をきちんと果たせましたか？」

『平成20年度』

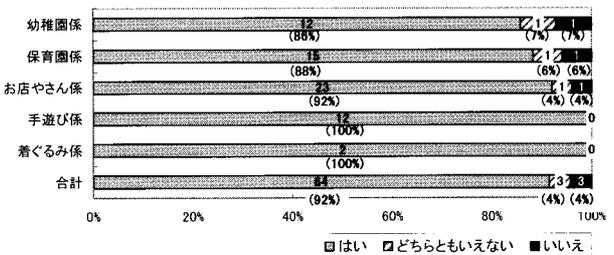


図5. 『平成21年度』

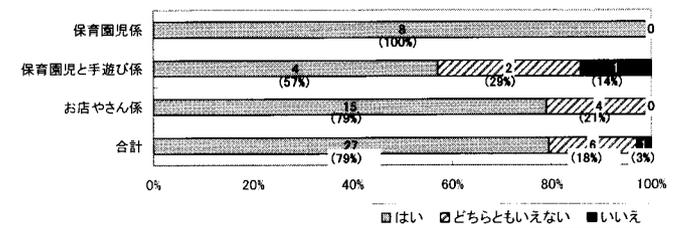


図6. 『平成22年度』

「はい」の合計では、20年度80%、21年度92%、22年度79%で、3カ年平均は84%と高く、園側より詳細に指導指示があったことについては、ほぼ達成していることが理解できる。

『質問3』おまつり広場の目的に対して、明確な援助・助言はできましたか？

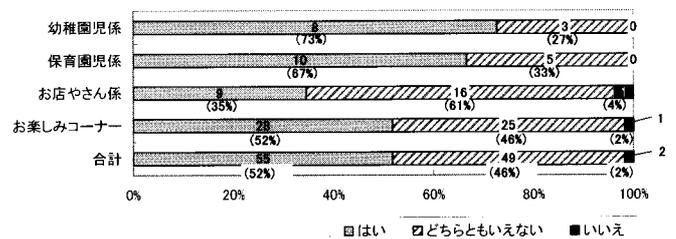


図7. 「おまつり広場の目的に対して明確な援助・助言が出来ましたか？」

『平成20年度』

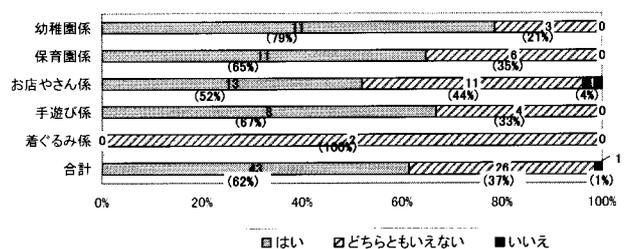


図8. 『平成21年度』

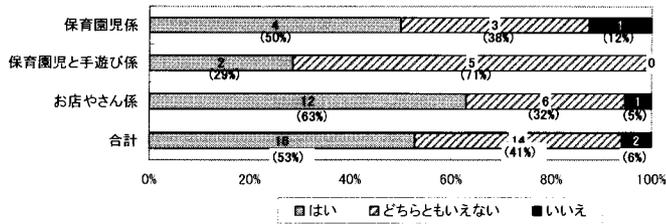


図 9. 『平成 22 年度』

「はい」の合計は、20 年度 52%、21 年度 62%、22 年度 53%で、3 カ年平均は 56%であった。

本学 1 年次生は 6 月に附属幼稚園で 1 週間の観察実習を終了して経験は浅く、保育能力の中でも「援助」と「助言」は技術を要するものであり、この数値は素直な意見として妥当であると判断できる。

『質問 5』子どもたちはスムーズに買い物ができていましたか？

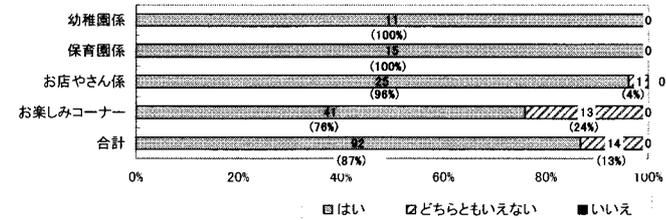


図 10. [子どもたちはスムーズに買い物ができましたか？]

『平成 20 年度』

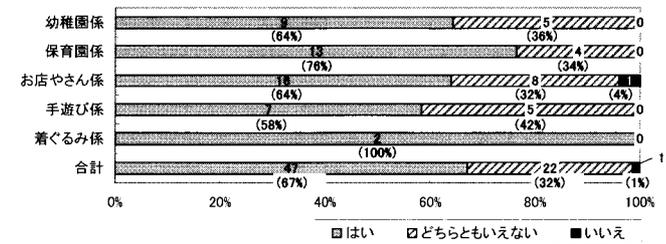


図 11. 『平成 21 年度』

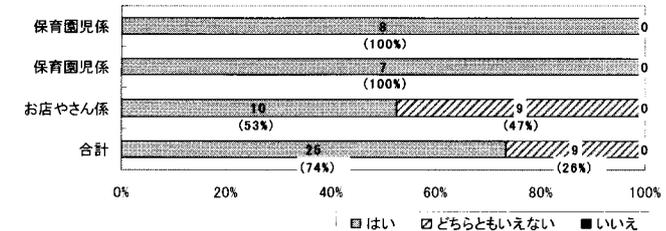


図 12. 『平成 22 年度』

「はい」の合計は、20 年度 73%、21 年度 67%、22 年度 74%、3 カ年平均 71%であった。指示があった事柄をやり逃げながら、同時進行で子どもを観察することは難しい領域でもあるが、よく観察しているといえる。

『質問 6』子どもたちはおまつり広場を楽しんでいたと思いますか？

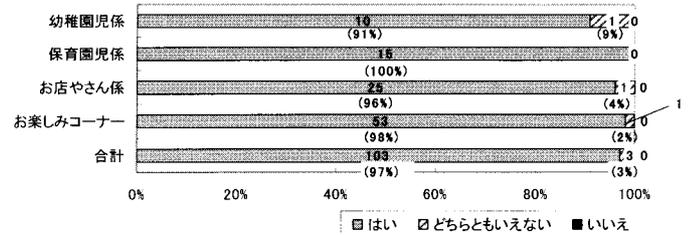


図 13. [子どもたちはおまつり広場を楽しんでいたと思いますか？]

『平成 20 年度』

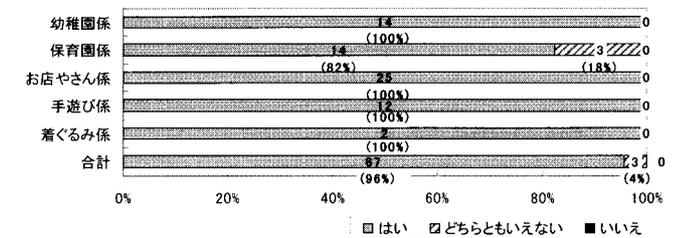


図 14. 『平成 21 年度』

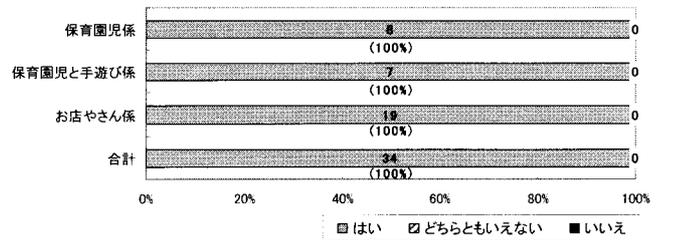


図 15. 『平成 22 年度』

「はい」の合計は、20 年度 97%、21 年度 96%、22 年度 100%で、3 カ年平均は 98%ととても高かった。

学生自身も楽しい一日を過ごし、子どもたちも楽しんでいたとしていることは相乗効果をもたらしていると考えられる。

『質問 7』子どもたちのお買い物のやり取りを聞きましたか？

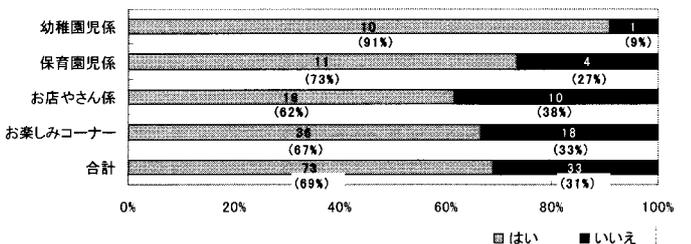


図 16. [子どもたちのお買い物のやり取りを聞きましたか？]

『平成 20 年度』

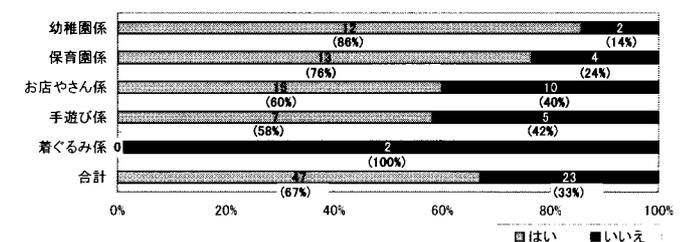


図 17. 『平成 21 年度』

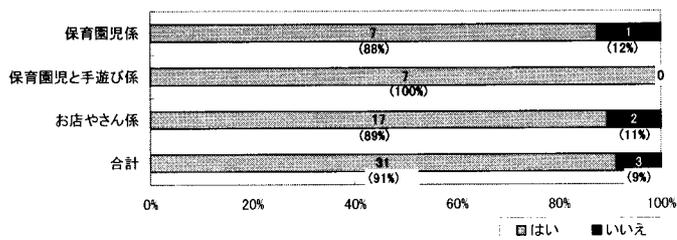


図 18. 『平成 22 年度』

「はい」の合計は、20年度69%、21年度67%、22年度91%で、3カ年平均は76%であった。お店屋さん係りの子どもで、売込みがとても上手で圧倒されてしまったと記述している学生もいた。

『質問8』あなたもお買い物したいと思いませんか？

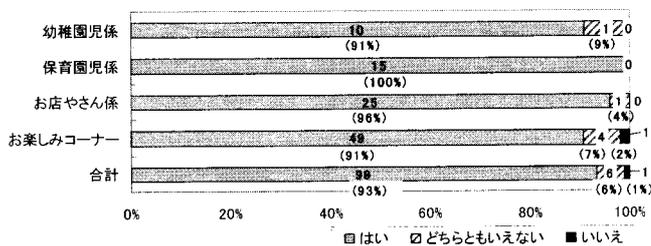


図 19. 『あなたもお買い物をしたいと思いませんか？』

『平成 20 年度』

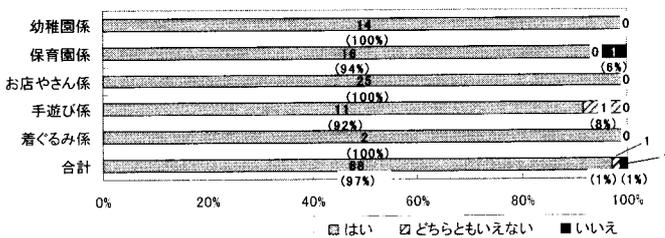


図 20. 『平成 21 年度』

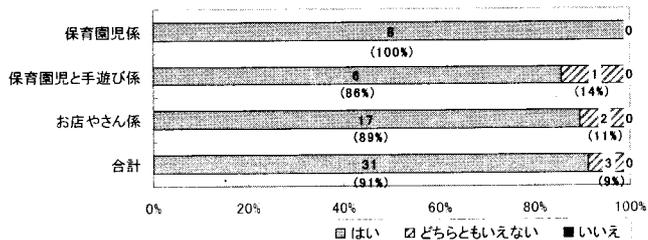


図 21. 『平成 22 年度』

「はい」の合計は、20年度93%、21年度97%、22年度91%で、3カ年平均は94%と高く、筆者もお買い物券と買い物カゴを頂き、買い物やお抹茶を頂いたりして、とても楽しい経験をした。「おまつり」の雰囲気もでており、また、お買い物したくなるような商品が沢山陳列してある。殆どの学生がお買い物をしたという気持ちが理解できる。

『質問9』お店屋さんで興味を持ったお店はありましたか？

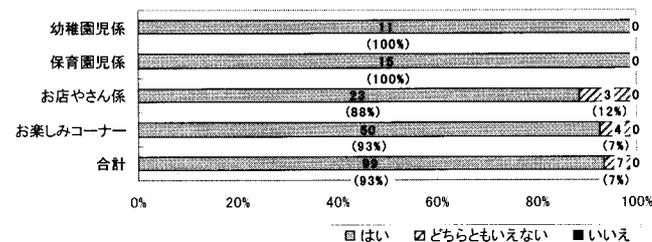


図 22. 『おみせやさんで興味を持ったお店はありましたか？』

『平成 20 年度』

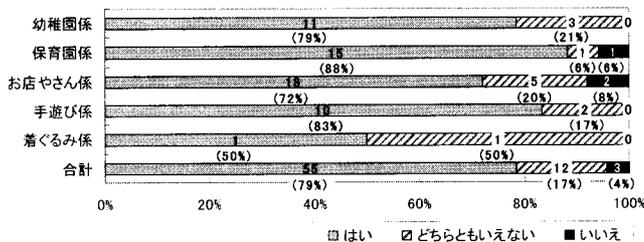


図 23. 『平成 21 年度』

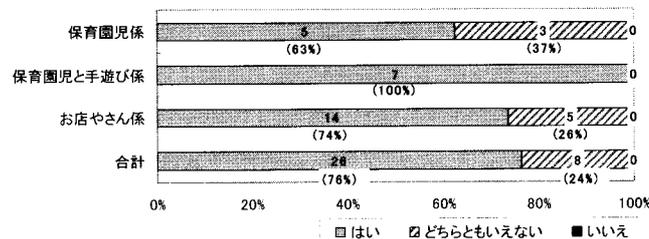


図 24. 『平成 22 年度』

「はい」の合計は、20年度93%、21年度79%、22年度76%、3カ年平均は83%であった。お店屋さんの商品は、モンテッソーリ教育の実践の中で製作したものや、「佐賀県地球なかよし園」として、リサイクル品の利用など、先生方の工夫と子どもたちの努力が随所に見られ、参考になる商品が多い。

『質問10』おまつり広場に参加して、自分の成長（勉強になった）に繋がったと思いますか？

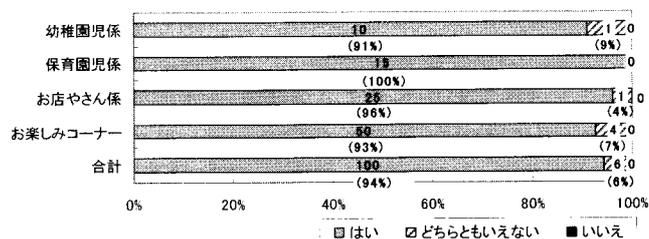


図 25. 『おまつり広場に参加して自分の成長につながったと思いますか？』

『平成 20 年度』

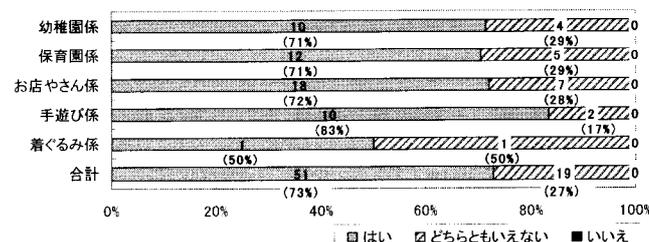


図 26. 『平成 21 年度』

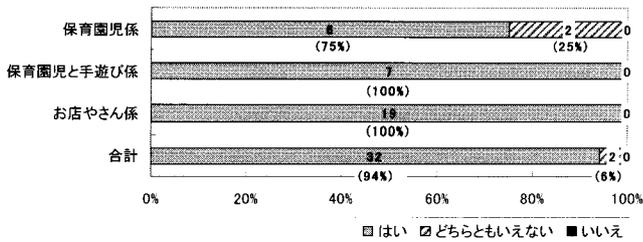


図 27. 『平成 22 年度』

「はい」の合計は、20 年度 94%、21 年度 73%、22 年度 94%、3 年平均は 87%と高かった。自由記述において「自分の成長に繋がった・勉強になった」とする項目が多く出ているので後述する。

『質問 11』おまつり広場に来年も後輩は全員参加したほうが良いと思いますか？

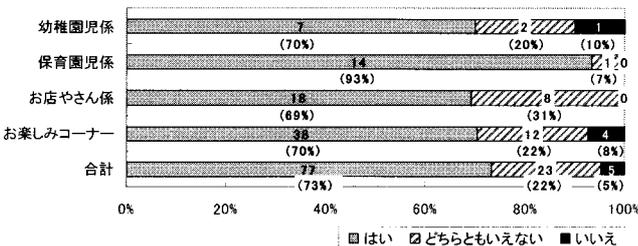


図 28. 『おまつり広場に来年も全員参加したほうが良いと思いますか？』

『平成 20 年度』

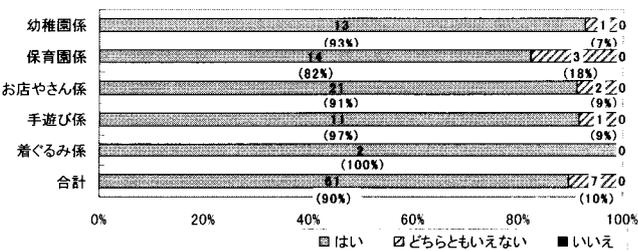


図 29. 『平成 21 年度』

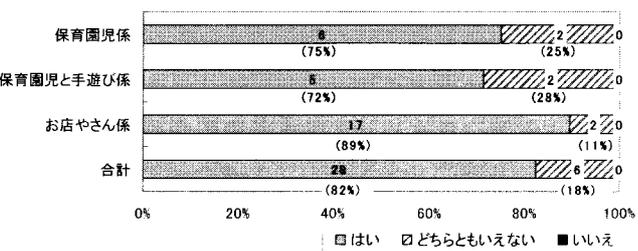


図 30. 『平成 22 年度』

「はい」の合計は、20 年度 73%、21 年度 90%、22 年度 82%、3 年平均は 82%であった。

(2) 『質問 12』平成 20 年度参加学生のみ質問－学生用テント「おたのしみコーナー」屋について

『質問 12-1』、「おたのしみコーナー」屋の（ペンダント、お花が笑ったのプレスレット）は良かったと思いますか？

「はい」73%、「どちらとも言えない」16%、「いいえ」11%

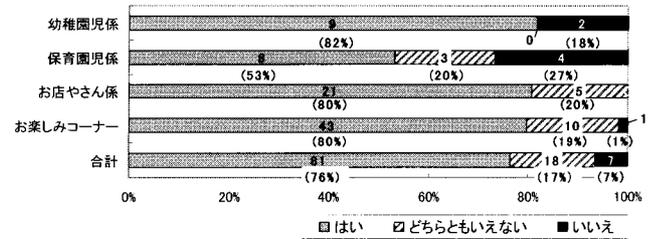


図 31. 『お楽しみの品物は良かったと思いますか？』

『平成 20 年度』

『質問 12-2』, 「いいえ」と答えられた方、何か別にあつたらお書きください。

もっと使用できるものが良い・女の子向き以外の物も必要・お花の材質を折り紙にすると良いの 3 項目であった。

『質問 12-3』, 「おたのしみコーナー」屋の品物は一人につきペンダント 4 個、お花のプレスレット 4 個を作りましたが、大変でしたか？

平均では、「はい」20%、「どちらとも言えない」29%、「いいえ」56%

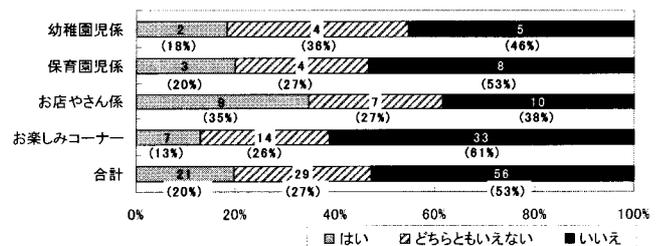


図 32. 『お楽しみの品物づくりは大変でしたか？』

『平成 20 年度』

『質問 12-4』, 「はい」と答えた方、どの様な点をそう思いましたか？

材料の配布が 1 週間前で製作期間が短い 9%、細かい作業が多い 4%、子どもが喜んでくれるよう丁寧に作らなくてはならない 3%、個数が多い、学園祭の準備と日程がかぶる、保育園実習終了日の翌日だったためすることが多かった、の 6 項目であった。

『質問 12-5』, おたのしみコーナー屋さんの品物を買って、子どもたちは喜んでいましたか？

「はい」50%、「どちらとも言えない」46%、「いいえ」0%、無記入 4%

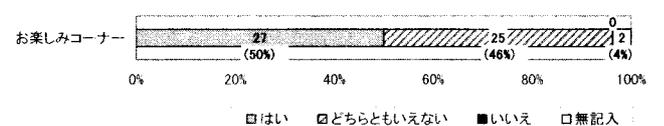


図 33. ～お楽しみコーナーの人へのアンケート～ (54 人)

『お楽しみコーナーの品物を買って子どもたちは喜んでいましたか？』

『質問 12-6』、お店屋さんとしての掛け声など上手にできましたか？

「はい」43%、「どちらとも言えない」44%、「いいえ」9%、「無記入」4%

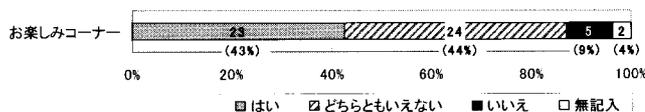


図 34. 「お店屋さんとしての掛け声など上手にできましたか？」

『質問 12-7』、テントの飾りつけは良かったと思いますか？

「はい」77%、「どちらとも言えない」15%、「いいえ」4%、「無記入」4%であった。

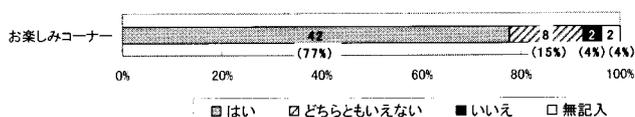


図 35. 「テントの飾りつけは良かったと思いますか？」

『質問 12-8』、「いいえ」の方、アドバイスをお願いします。

お楽しみコーナーと書いた看板の準備・装飾7%、もう少ししっかりした造りにしたほうが良かった、の2項目であった。

平成 20 年度は学生数も多く両コース全員だったため、各係りを決めて残った学生対応のためのお店開きだった。テントの中は混雑していたので、上記のような結果が出たものと推測される。

(3) 自由記述式回答について

『質問 1』『質問 1-1』についての「いいえ」は 0%であった。

『質問 1-2』『おまつり広場に参加して楽しい 1 日が過ごせましたか？』で、「はい」と答えた方、参加してどのようなところが参考になったと思いますか？』については、記述数が多かったため、類似した内容を集めて項目を編成し、それを 3 つのカテゴリーに分類した。カテゴリーは、「学生自身」で 3 項目、「保育者からの学び」5 項目、「子どもからの学び」6 項目とした。

<学生自身> 3 項目、①「学生同士の関わり・交流」、平成 20 年 1%、平成 21 年 4%、平成 22 年 6%、②「周囲との協力（準備・片付け）」、平成 20 年 2%、平成 21 年 3%、平成 22 年 6%、③「学生の喜び・楽しみ」、平成 20 年 25%、平成 21 年 21%、平成 22 年 12%、

<保育者からの学び> 5 項目、①「声掛けの仕方」、平成 20 年 11%、平成 21 年 17%、平成 22 年 18%、②

「保育者の対応の仕方（行動・気配り・見守り）」、平成 20 年 22%、平成 21 年 29%、平成 22 年 32%、③「商品の工夫（保育内容に関するもの）」、平成 20 年 24%、平成 21 年 23%、平成 22 年 12%、④「廃品利用の工夫（おもちゃ等）」、平成 20 年 28%、平成 21 年 4%、平成 22 年 3%、⑤「環境の工夫（看板・飾りつけ等）」、平成 20 年 18%、平成 21 年 3%、平成 22 年 3%、

<子どもからの学び> 6 項目、①「子どもの成長・発達」、平成 20 年 14%、平成 21 年 26%、平成 22 年 41%、②「子どもとの触れ合い・接し方」、平成 20 年 16%、平成 21 年 26%、平成 22 年 24%、③「子ども同士のやり取り（年長児と年少児のやり取り）」、平成 20 年 13%、平成 21 年 4%、平成 22 年 6%、④「子どもの特質（性格・好き嫌い）」、平成 20 年 4%、平成 21 年 7%、平成 22 年 9%、⑤「子どもの技能（お店の宣伝ややり取り）」、平成 20 年 18%、平成 21 年 6%、平成 22 年 15%、⑥「子どもの興味・関心について」平成 20 年 14%、平成 21 年 16%、平成 22 年 9%であった。

各年度上位 5 までを挙げる。

平成 20 年度は、第 1 位、廃品利用の工夫（おもちゃ等）28%、第 2 位、学生の喜び・楽しみ 25%、第 3 位、商品の工夫（保育内容）24%、第 4 位、保育者の対応の仕方（行動・気配り・見守り）22%、第 5 位、環境の工夫（飾りつけ・看板等）18%、平成 21 年の第 1 位、保育者の対応の仕方（行動・気配り・見守り）29%、第 2 位、子どもの成長発達 26%、第 3 位、子どもとの触れ合い・接し方 26%、第 4 位、商品の工夫（保育内容）23%、第 5 位、声掛けの仕方 17%、平成 22 年の第 1 位は、子どもの成長発達 41%、第 2 位、保育者の対応の仕方（行動・気配り・見守り）32%、第 3 位、子どもとの触れ合い・接し方 24%、第 4 位、声掛けの仕方 18%、第 5 位、子どもの技能（お店のやり取り・宣伝）15%であった。

3 年トータルで上位に入ったのは、「保育者の対応の仕方（行動・気配り・見守り）」であり、保育者の一人ひとりの子どもに合わせた臨機応変な対応と、子どもに主体性を持たせた見守りなど、多くの学生が感心し憧れを持って観察していた事項である。また、6 月の観察実習以来、4 ヶ月ぶりの園児との再会で、子どもたちの成長発達には目を見張るものがあったとして、子どもたちとの再会を喜んでる。

松山 (2008)⁴⁾ は、「久我 (2006) が、保育者の自己規範性への自覚は、むしろ子どもへの理解とかかわり方の深さ、多様性を可能にする立脚点であると述べ、まず子供を受け止め、子どもの環境への自在な働きかけに関わり、子どもとの関係の両義性を引き受けつつ、子どもの育ちにまなざしを注ぎ、省みる」と述べている。まさに附属認定こども園の保育者は実践しているといえよう。

また、「声掛けの仕方」、「商品の工夫」、「学生の喜び・楽しみ」、「子どもの成長・発達」、「子どもの触れ合い・接し方」等は、2年連続で上位に入っている。

附属園の保育者たちは、全体を見ながら、子どもたちの見守りや学生・エルダーカレッジ生へも配慮していることが理解できる。このような保育者の配慮が「学生の喜び・楽しみ」に繋がったものと言えるであろう。平成21年度においては、「エルダーカレッジ生からの学び」を挙げる学生もいた。

(4) 自由記述回答のメリットとデメリットについては、学生の文脈を忠実に記載するように勤めた。

『質問1-3』②③限目が休講で、「おまつり広場」に全員参加しましたが、この件についてはどう考えますか？

メリットについては31項目に分類した。数値が高かった項目より挙げる。

平成20年度、第1位、「普段の授業では学べない良い体験ができた（現場に出て学んだほうが色々発見があって楽しい・勉強になった）」23%、第2位、「全員参加で一致団結して経験することができ、意義があった」、20%、第3位、「子どもと沢山触れ合うことができた」17%、「将来先生になったときに役に立つ」、「通常保育と違った子どもの姿が見られた」、「子どもの買い物のやり取りが見られた」、「11月実習前に子どもと触れ合うことができ」、「さまざまなことを学んだ」、「行事のやり方が分かった（雰囲気味わうことができた）」、「休講にした以上の価値や満足感があった」、「子どもの成長がみられた」、「沢山の人で、お祭りの雰囲気が出ていた」、「来年も参加したい」、「いろいろな子どもたちに対しての援助の仕方を学べた」、「先生方の子どもたちへの声掛けなど参考になった」、「全員参加だったので授業内容に差が出ずに良かった」、「実習に対する課題ができた」、「講義のことを考えずに（おまつり広場）に最後まで参加できる」、「人がいっぱい賑やかで楽しかった」、「準備やテントの片付けが早く済んだ」、「一人ひとりの子どもと接する人数がいたのでよかった」、「手作りの商品が参考になった」、「今後の実習や授業に活かせる」、「実習以外で関わることができたので、実習より楽しく接することができた」、「他の人が子どもにどのように接しているのか見れたこと」、「実習担当クラスの子どもと合えたこと」、「上の子が下の子の面倒を見ていた」、「お店の飾り付けが早くできた」、「子どもたちの生き生きした表情がみられた」、「授業を受けなくてよかった」、「保育教材が参考になった」の31項目であった。

平成21年度、第1位、「実習以外の子どもとの関わり・触れ合い」37%、第2位、「講義で学べないことが学べた（園行事・実践能力を身に付けた）」14%、第3位、

「普段とは違う保育者や子どもたちを見ることができた」と「全員同じ体験ができた」11%、「勉強になった」、「将来のための良い経験になった」、「授業の一環として参加できたので良かった（真剣に取り組める）」、「子どもと触れ合うことで楽しめた」、「触れ合う時間が沢山ありよかった」、「11月の実習前に園児の様子が見られた（いつもと違う一面も）」、「お祭りムードを子どもたちと一緒に体験できた」、「一生懸命に取り組み、集中できた」、「いろいろな人との関わり」、「子ども達が楽しくお買い物できていた」、「準備から片付けまで参加できて良かった」、「授業が休講になり、おまつり広場に参加できて良かった」、「授業より、おまつり広場が楽しいので良かった」、「学生同士の交流ができた（他のクラスの）」、「人数が多かったので余裕を持ってできた」、「保育園では一人ひとりの子どもに付いて援助できた」、「係りを分担して、スムーズに進んだ」、「おみこしや出し物になど参考になった」、「授業を受けなくて済んだ（休講で嬉しい）」、「良い授業に参加できた」、「①から③限目まで休講だったのでバタバタせずに澄んだ」、「現場の先生への協力ができる」、「現場の大変さが分かった（体力的）」、「自分の役割を果たすことができた」、の28項目であった。

平成22年度、第1位、「良い経験になった」32%、第2位、「子どもとの触れ合い・関わりができた」29%、第3位、「子どもたちと楽しく活動できた」21%、「子どもの成長を肌で感じる事ができた」、「実習前に子どもの成長・発達段階がみられた」、「クラスの絆が深まった」、「一人ひとりに保育者の目が行き届いていた」、「お店が多かったので担当ができた」、「片付けなど早く終わった」、「先生方の手伝いができた」、「余裕を持って参加できた」、「子どもたちの生き生きした姿を見ることができた」、「子どもたちの成長がみられた」の13項目である。

デメリットについて

平成20年度、第1位、「補講が増える（きつい）」28%、第2位、「学生テント（お楽しみコーナー）の人数が多すぎて、仕事のない人もいたと思う」12%、第3位、「休講になった分授業が遅れる」10%、「次の授業まであまり時間がなかった（昼食を取るのにかなり大変であった）」、「何もしていない人はつまらなかったと思う」、「学生テントで売る人が多く、売ることができなかった」、「お楽しみコーナー（学生テント）はもう少し少なくてよかった」、「4限目以降も休講が良かった（とても疲れたので）」、「動いている人とそうでない人との差がでた」、「楽しめる反面、だらけた面もあった」、「学生が多く、子どもより目立っていた」、「途中、暇になった」、「休講にするなら5限目まで休講にしたほうが良い（中途半端）」、「その後の授業がきつかった」の14項目挙げた。

平成21年度、第1位、「後から補講が入る（増える）」

20%、第2位、「授業が遅れる」16%、第3位「午前中に疲れてしまい5限目はきつかった」4%、「全員参加で人数が多く、ボーッとしていた」、「授業のほう良かった」、「授業がない分の提出物がある」、「人が多いので迷子になる子が出てくる」、「保育室で学生が多すぎた」、「人数が多いと感染症になる可能性がある」、「人数を減らしてボランティアにしたらよかった」、「人数が多かったので作業が早く終わり、することがなくなってしまう」、「手遊びチームの人が多かった」、「朝の集合が早かった」、「学生同士で集まって私語をしていた」、「4限目まで休講にしてほしかった」、「幼稚園係りだったが、お店屋さんになった」の16項目であった。

平成22年度、第1位、「補講がある」21%、第2位、「授業回数が減る」9%、3位はなく、「4限目に授業があった」、「風邪を引いた子がいて移された」、「疲れて4限目の授業に出られなかった」の5項目であった。

上位を占めたのは「普段の授業では学べない良い体験ができた」、「実習以外の子どもとの関わり・触れ合いができた」、「全員参加で一致団結して経験することができ、意義があった」などであった。

岡本、東(2002)⁵⁾は、学生全員が共通場面を体験する機会は、幼児理解、観察視点の定め方、幼児とのかかわり方のポイントが具体的に理解できるとしている。このような共通体験の場をより多く提供できるのが大学の課題であるといえよう。

『質問1-4』終了後、各テントの片付けを全員でしましたが、これについてはどのように考えますか？

メリット

平成20年度、第1位、「人数が多いので、早く片付けることができる」54%、第2位、「皆と協力して片付けることができる」33%、第3位、「テントのたたみ方を覚えた(普段の授業では学べない)」23%、「先生方の手伝いができる」、「今まで話したことのない人とも協力して片付けることができた」、「将来役に立つ」、「あらかじめ大変さ、難しさを知った」、「一人ひとりが責任を持ってしていた」、「子ども対応のみが仕事でないことが分かる」、「裏方の仕事が理解できた」、「協力してすることの大切さが分かった」、「片付けは当然のことと思う」の12項目であった。

平成21年度、第1位、「早く片付けられた」46%、第2位、「全員で協力できたのでよかった(重い骨組を一人で運ばなくてすむ・協力することの大切さ)」43%、第3位、「全員がテントの片付け方を知ることができる」14%、「良い経験になった」、「今後に生かすことができる」、「達成感を味わえた」、「経験者が一人はいたのでよかった」、「できる人に教えてもらいながらできた」、「団

結力ができた」、「先生方とのコミュニケーションが取れてよかった」、「全員で綺麗にする気持ちよさ味わえた」、「思いやりの気持ちが高まった」、「声掛けなどができてよかった」、「できない人を指導できてよかった」、「最後まで責任を持って取り組めた」、「園の先生方でするよりも、作業が早く済んだと思う」、「できる人、できない人と半々だったのでよかった」、「テントの骨組は、布別に分けられた」、「配属が決まっていた、スムーズにできた」、「経験したことのある人は、手際がよかった」、「役割分担したので、やり易かった」の21項目であった。

平成22年度、第1位、早く片付くので良い」44%、第2位、「Aクラスの団結力が深まった」32%、第3位、「テントのたたみ方を知った」18%、「協力してできた」、「人数が多かったので作業がスムーズに進んだ」、「自然に役割が出来ていた」の6項目であった。

デメリット

平成20年度、第1位、「何もしない人もいる」13%、第2位、「昼食を取る時間が短く、バタバタであった」6%、第3位、「テントのたたみ方が難しかった」5%、「運ぶときに、片付け場所が分からず混雑しとまどった」、「片付け方が分からず怪我をした(しそうになった)」、「女性が多かったので、力不足でとても疲れた」、「人任せの人が出てくる(片付け方が分からない人)」、「割り当てて片付けたほうが早くできたと思う」、「テントが重いから大変」、「テントの片付け方が分からない人たちだけするのは怖かった」、「学校のテントと幼稚園・保育園のテントと分かるように場所を指定してほしいかった」、「保育者は疲れます」、「クラスにテントを運ぶ人が少なかった」、「筋肉痛になった」、「テントの梁を軽トラックまで運ぶのが大変だった」、「指示する人がいなくて、片付けた後やり直した」、「先生によって片付け方が違った」、「怪我などが心配であった」の18項目であった。

平成21年度、第1位、「危ない人がいた」9%、第2位、「安全面に問題がある」6%、第3位、「作業が終わっていないのに遊んでいる人がいた」・「早く終わりすぎて、手が空く人が多くなる」4%、「片付けの分からない人がいて大変だった」、「我先に倉庫へ行くので混雑していた」、「テントの片付け方が分からず、時間がかかった」、「テントの鉄骨が重かった」、「グループが決まっていたがバラバラであった(グループの意味がなかった)」、「テントの片付けの経験のない人は時間がかかった」、「指導する人がいなくて危なかった」、「手を挟みそうになった」、「力仕事が大変」、「力のない人や、やり方が分からない人がいる」、「人数が多いところもあり、片付けにくい部分もあった」、「片付け場所の指示をする人がおらず困った」、「人数が多かったので見ただけの人もいた」、「片付けを積極的にしていない人がいた」、「全員でテン

ト片付けをしたら効率が悪かった」、「きちんと紐で縛られておらず、やり直しをして時間がかかる」、「晴天の日の（日に照らされて）最後にテントの片付けでヘナヘナでした」、「片付け方を把握できていなかったことがあった」、「誰かするだろうという甘え」、「疑問点も、誰かが分かるだろうという雰囲気があった」、の24項目であった。

平成22年度、第1位、「何もしないで立っている人が出てくる」15%、以下各1%である。「テントの片付けが分からない人はできない」、「学校に戻る時間が遅くなる」、「紐がなかったり、テントの片付け場所が分からず困った」、「男性が主になって動くべきだと思った」、「屋根の部分をつたんだ人がいなくなり、どのテントの物か分からなくなった」、「1グループに1人片付けを指導する人がいたらよかった」、「作業をする人、しない人が出てきた」の8項目であった。

テント片付けについては、「協力すること」、「一致団結することの大切さ」、「裏方の仕事理解」や「将来役に立つ」、「クラスの団結力が深まった」など、肯定的な意見が多かった。なかには「先生方とのコミュニケーションが取れてよかった」や「先生の手伝いができる」として、保育者への思いやりの気持ちを寄せる学生や、クラスの絆や団結力が生まれたなどの意見が出ている。

『質問2-1』自分の与えられた役割（仕事）はきちんと果たせましたか？において「いいえ」と答えた方は理由を聞かしてください。

平成20年度、子どもたちと遊んでいたため	2人
平成21年度、子どもに対応していたため	1人
他の仕事をしていたため	1人
着ぐるみを子どもが怖がりお店に近づけなかったため	1人
声掛けができなかったため	1人
先生の指示でしか動けなかったため	1人
平成22年度、集合時間に少し遅れた	1人

『質問3-1』おまつり広場の目的である①自分たちの作品を使って遊ぶ楽しさを味わう②友だちと協力して、ダイナミックなごっこ遊びを楽しむと有りますが、その的確な援助や助言はできましたか？に対し、「いいえ」と答えた方はなぜできなかったと思いますか？

平成20年度、自分の役割に一生懸命で、あまり子どもたちと接することが出来なかったから	1人
子ども達がお買い物に夢中だったので、声掛けができなかった	1人
平成21年度、いっぱいいっぱいになったための確かな声掛けをすることができなかったから	1人

平成22年度、おまつり広場の目的を理解していなかった	2人
役割をとおして子どもたちと関わっていた	1人

『質問4』幼稚園・保育園のことについてお聞きします

『質問4-1』幼稚園・保育園の先生方の当日の動き（援助など）について、どの様に感じますか？

数値の高かった項目より列挙する。

平成20年度、(14項目)第1位、「動きを素晴らしいと感じた」28%、第2位、「全体を把握して動いていた」24%、第3位、「一人ひとりの子どもに合った援助ができていた」21%、「子どもたちへの声掛けがすごかった」、「おまつり広場の雰囲気作りをしていた」、「子どもと共に楽しんでいた」、「学生への的確な指示を出していた」、「できていない子への配慮が行き届いていた」、「学生のこと常々考えていた」、「笑顔がよかった」、「学生への援助ができていた」、「常に動いていた」、「子どもに信頼されていると感じた」、「元気だなと思った」

平成21年度、(23項目)、第1位、「素早く臨機応変に対応されていた」29%、第2位、「子ども一人ひとりの発達に合った援助をしていた」21%、第3位、「園児が主体となってするよう促していた」16%、「言葉掛けがよくできていた」、「的確な指示、先を見据えた援助でお祭りをスムーズに問題なく進めていた」、「子どもたちと楽しんでいた」、「学生が分からないことを優しく教えてくれた」、「見ていて学ぶことが多く素晴らしいと思った」、「笑顔で接していた」、「子どもの気持ちになって対応していた」、「お買い物している子どもの様子や、お店屋さんの写真を取っていた」、「0,1歳児の先生は、子ども達のはぐれないよう、しっかりと手をつないでいた」、「子ども達が流れを楽しんでいた」、「忙しかったため、ピリピリされていた」、「子どもへの目配りができていた」、「気配りがよくできていた」、「お祭りを盛り上げていた」、「忙しくて大変そうであった」、「細かい準備が行われていた」、「アイデアがすごいと感じた」、「子どもたちへの接し方を見せてもらった」、「短大部教員の声掛けが嬉しかった」

平成22年度(14項目)、第1位、「子どもが主体で、見守りながら少し手伝っていた」・「おまつり広場を子ども達が楽しめるように配慮していた」18%、第2位、「一人ひとりを良く把握して、サポートしていた」・「テキパキと動いていた」12%、「通常保育時よりも、子どもたちの様子をしっかりと見られていた」、「言うことをきかない子どもは、お買い物に行かせないと言っていた」、「子どもたちに分かりやすく説明していた」、「子どもへの対応に困っているとき、対応の仕方や声掛けの仕方を学ん

だ]、「状況をよく読み取って対応していた」、「早朝から看板の準備など大変だと思った」、「子どもの活動がスムーズに行くよう、自ら動いていた」、「園児と一緒に楽しんでいた」、「動きが的確で、自分が役に立てるのか不安になった」、「自分の仕事をしながら、学生にも配慮していた」

3ヵ年共に、先生方は子ども主体で見守り、一人ひとりの子どもに合った援助をし、声掛け、動き、学生への配慮も行き届いていたこと、また、保育者自身も楽しんでいて、学生は「素晴らしい!」、「凄かった!」と表現している。筆者も保育所実習担当を10年間指導してきたが、このような言葉を学生から聞いたり、実習日誌で見たりすることはなかった。

『質問4-2』、幼稚園・保育園の先生方の「おまつり広場」に対する前準備（仕事）はどのようなものがあったと思はれますか？

平成20年度（21項目）、第1位「商品準備（食べ物、ラッピング、袋詰め、抹茶、数量確認）」64%、第2位、「看板・飾り付け」63%、第3位、「テント張り（屋根の溜まり水落とし）」62%、「先生同士の会議（時間配分・配置・店の種類）」32%、「机・椅子の準備」30%、「子どもへの説明（太鼓の指導・整列方法・御みこし指導・製作の仕方・約束事）」26%、「チケット作り」25%、「道具の準備（お面・はっぴ、お買い物バック・来賓のペンダント・ゲームの道具・プログラム・畳）」22%、「環境づくり（音楽・陳列・お店の案内板・整列場所の案内）」、「商品のアイディア」、「白線引き」、「乗り物の準備」、「御みこしづくり」、「司会振興」、「材料集め」、「学生への指導」、「名札作り」、「当日早朝・終了後の準備」、「遊具の準備」、「エルダーカレッジ生の指導」、「子どもの受け入れ」、「司会進行」

平成21年度、（29項目）、第1位、「看板等の飾りつけ」46%、第2位、「テントの配置・片付け方法について」44%、第3位、「当日の詳しい説明の準備」23%、「年齢に合った品物の選択」、「子どもたちへの事前指導（グループ分け・お相手さん決め・太鼓の演奏）」、「店の配置」、「チケット作成」、「品物の袋詰め」、「机・椅子運び」、「子どもたちへの対応の仕方」、「実習生への指導」、「買い物バックの作成」、「子どもたちへの役割分担」、「出し物の準備（お神輿）」、「乗り物について」、「エルダーカレッジ生の方へ参加のお願い」、「パン・クッキーの作成・袋詰め」、「商品作り」、「ゲームの準備」、「係りの振り分け」、「早朝からの準備」

平成22年度、（25項目）、第1位、「看板づくり」53%、第2位、「テント立て」35%、第3位、「お店の品物作り」32%、「お店の配置」、「机・椅子の準備」、「飾りつけ」、「計画のための会議（打ち合わせ）」、「お買い

物券（チケット）作り」、「お神輿づくり」、「飾り作り」、「バック作り」、「アナンスの内容」、「パンを置くシートづくり」、「エルダーカレッジ生用の椅子」、「クッキー・パンを袋に詰める」、「会場設営」、「お相手さん決め」、「学生への説明文書作り」、「子どもたちの役割きめ」、「子どもの作品のラッピング」、「頭につけるバッジづくり」、「アレルギーのある子用のお菓子の用意」、「道具類を運んでおく」、「役割きめ」、「子どもたちの指導」などがあつた。

前準備についても、学生は多くの仕事の種類に気付きを得ている。前日に雨が降った年度もあり、テントの屋根に溜まった雨水を落とす保育者の姿にも気付き、手伝いをしている。気付きは現場体験、その他の体験を重ねていって初めて培われるものであり、気付きのある生活体験を積むことで感性も育っていくのではないだろうか。

『質問7-1』、あなたは子どもたちのお買い物のやり取りを聞きましたか？の問いに対して「はい」と答えた方、どのように思いましたか？

平成20年度（14項目）、第1位、「挨拶ができていて凄と思った」・「自分の役割になりきってやり取りができていたと感じた」19%、第2位、「年中・年少組のお世話を年長さんが行っていた」10%、第3位、「おまつり広場を楽しんでいると感じた」9%、「売り買いに戸惑う子がいた」、「やり取りを可愛らしいと感じた」、「お店の仕組みを分かる機会になると感じた」、「おまつり広場の中で成長していると感じた」、「楽しそうに買い物をしていると感じた」、「他の子どもと協力できていると感じた」、「商品をお勧めすることができていた」、「お相手さんで意見が食い違うことがあつていた」、「買い物に悩む子がいた」、「大人の買い物のやり取りをよく聞いていると感じた」

平成21年度、（18項目）、第1位、「挨拶ができていた（いらっしゃいませ・ありがとうございます・いかがですか）」20%、第2位、「お店屋さんを楽しそうにしていた」11%、第3位、「お店屋さん・お客さんにきちんと分かれていた」10%、「1歳児は学生が言う通りに真似していた」、「異年齢保育のよさを感じた」、「子ども達がお店屋さんになりきって動いていた」、「迷っている子には声掛けをした」、「子どもたちのお買い物の様子を見て、自分の幼少期のことを思い出した」、「お客さんが少ない時は（楽しいですよ）などと呼び込みをしていた」、「嬉しそうに買ったものを見せていた」、「買ったものを直ぐ開けたがっていた」、「実体験することで、自信になっていた」、「恥ずかしそうにしていたが、慣れてやり取りができていた」、「混雑したときには、やり取りが上手くできていなかった」、「お買い物券の出来ない子は、（ここは何の色ですか？）と色で判断していた」、「お客さん

に対する声掛けができていた」、「相手に優しく接していた」、「ゲームで、当たりが出たら（おめでとう）と言っていた」

平成22年度、(17項目)、第1位、「お店屋さんになりきっていた」・「お買い物のやり取り（挨拶）が、しっかりできていた（ありがとうございました・ちょっとおまちください・券ください・いらっしやい・これください・はい、どうぞ）」18%、第2位、「年長児が年少児をしっかりとリードしていた」・「チケットをもらってから、商品を渡していた」12%、「0歳児で言葉でのやり取りはできないが、券を渡してジュースをもらい、嬉しそうにしていた」、「可愛いと思った」、「子どもらしいやり取りがよかった」、「チケット（券）を渡したか確かめてから、ゲームをさせていた」、「ジュースの（オレンジ）と（リンゴ）のどちらが良いか聞いていた」、「しっかりした子が仕切っていた」、「上手に売っている子もいたが、中には押し売りしている子もいた」、「次から次にお客を呼び込んでいる姿に驚いた」、「積極的な子や消極的な子がいて、援助が大変であった」、「ゲーム屋では4歳児が5歳児に仕事を取られ、どう声掛けしたら良いか分からなかった」、「子どもから元気ももらった」、「自分勝手に動く子どももいた」、「3歳児がジュースを飲んでよいのか、指示が先生ごとに違っていて分かりづらかった」などが挙げられた。

3カ年共に、子どもたちが「お買い物の挨拶がしっかりできていた」、「お店屋さんになりきっていた」「年長児が年中児や年少児をしっかりとリードしていた」など、多くの項目が挙がり、子どもの売り込みの上手さに驚かされる場面もあったようで、子どもたちの細かい会話にも耳を傾けていることがわかる。

『質問9-1』、お店屋さんで興味を（気に入った）持ったお店はありましたか？「はい」と答えた方、何屋さんでしたか？

平成20年度、第1位、「おしゃれ屋」・「クッキー屋」29%、第2位、「抹茶屋」25%、第3位、「おもちゃ屋」22%、「ゲーム屋」・「パン屋」18%、「ポニョの家」・「ジュース屋」15%、「お面や」7%、「看板」3%、「乗り物」2%

平成21年度、第1位、「抹茶屋」26%、第2位、「おもちゃ」・「パン屋」16%、第3位、「おしゃれ屋」14%、「ゲーム屋」・「クッキー屋」7%、「お面屋」3%

平成22年度、第1位「抹茶屋」29%、第2位、「クッキー屋」24%、第3位、「パン屋」18%、「おしゃれ屋」・「おもちゃ屋」・「ジュース屋」9%、「ゲーム屋」6%

『質問10-1』「おまつり広場」に参加して、自分の成長（勉強）に繋がったと思いますか？「はい」と答えた方、勉強や参考になった点を具体的に記入してください。

平成20年度は、「はい」「いいえ」の回答のみで、自由記述式回答は入っていない。

平成21年度（23項目）、第1位、「先生方の声掛けや配慮」・「子どもの関わり方」29%、第2位、「子どもの誘導の仕方」・「お店の工夫と作品のアイデア」9%、第3位、「子どもたちの主体性を持たせる」7%、「将来保育者になった時に参考になる」、「子ども達みんなが協力している様子」、「子どもたちの普段と違う様子が見られた」、「子どもの喜びと楽しさを共感」、「お買い物が楽しくできる工夫」、「前準備の仕方と重要性」、「子どももっと関わりたくなった」、「子どもたちの意欲を持った姿」、「先生方の絵」、「0歳児の特徴について」、「成長の違いについて」、「約束をするときのお話の仕方」、「着ぐるみを怖がる子への対応の仕方」、「先生にももらったアドバイス」、「列車の構成」、「お神輿の構成」、「子どもの前で手遊びをしたこと」、「積極的に参加すること」

平成22年度（20項目）、第1位、「子どもの買い物の仕方」24%、第2位、「イベントでの声掛けができた」15%、第3位、「子どものやり取り」・「実習以外のクラスの子どもの成長の違いが分かった」12%、「おまつり広場の雰囲気づくり」、「子どもと一緒に楽しみながら活動する」、「前期と後期での子どもの成長の違い」、「先生の対応の仕方や動き」、「手遊び」、「年齢差のある子とのコミュニケーション」、「準備、片付けの大変さを知った」、「どの様な材料で商品を作っているのか」、「ジュースの選び方」、「お買い物バックの大きさ」、「お花屋さんの活動の仕方」、「お祭りで使用するもの」、「通常保育とは違う一面が見られた」、「子どものお買い物の捉え方が分かった」、「子どもを動かすときは自らが動くこと」、「子どもたちの興味」などがあつた。

自分の成長（勉強＝学び）に繋がりましたかの回答から、「おまつり広場」の環境を構成している人（人的環境）、物（物的環境）、時間、空間や場、雰囲気などすべてのものから、学生は「おまつり広場」というステージ（保育の全体的体験の場）をとおして、即戦力となる保育実践力を身に付けるための経験をしたのではないかと思われる。

『質問11-1』、おまつり広場の今後のことについて、全員参加するとしたらどの様にしたら良いと思いますか？（交通手段、荷物、服装、名札、品物、手遊び、お店の飾りつけ、時間、その他）第3位までを挙げる。

平成20年度、第1位、「そのままが良い（現状維持）」・「事前準備をしっかり早くから行う（準備時間の設定）」・「手遊びのやり方、タイミングの工夫」18%、第2位、「お店の看板、飾りつけの工夫、時間の設定」16%、第3位、「実習服着用」12%

平成21年度、第1位、「今回と同じでよい」17%、第

2位、「服装は全員揃える」14%、第3位、「役割分担をもう少し細かく（学生テントのお店）」7%

平成22年度 第1位、「今年と同じでよい」24%、「手遊びはしたほうが良い」、「交通手段は徒歩が良い」等

3ヵ年共に、「このままでよい」と回答し、学生が「おまつり広場」の参加を満足していると思われる。

5、考 察

1年次生は入学後、附属幼稚園で6月に1週間の観察実習をし、11月に参加実習が控えている（前期・後期共に同じクラスで実習する）。「おまつり広場」は10月末実施で、学生にとっては幼稚園児や保育園児を一度に全員、異年齢を同じ場で幼児理解を深めることの出来る良い機会であり、4ヶ月ぶりの子どもとの再会で喜びと楽しさを体感できる日である。学生も92%が楽しい1日であったと回答し、「子どもたちも楽しんでいたか」の問いに98%の学生が楽しんでいたと回答している。これは、「子どもたちの生き生きした表情がみられた」とする意見からも理解できる。

附属園保育者は 子どもの声掛け・見守り・学生への配慮・目配り・気配り・臨機応変さ・子どもたちと一緒に楽しむことなど、保育技術が高度であり、各年度共によく学生も観察していることが理解できる。

豊田和子(2011)¹⁾は、小田倉が第13回OECD/Japansセミナーにおいて、「(保育者性)育成」という言葉を保育者の専門性に当てはめて、保育現場観察を取り入れた幼児理解の促進を実践的に試み、大学で養成すべき性質・資質・能力の具体的な指標の提案を試みている。ここでの強調点は、「幼児理解」であると述べているとしている。

エルダーカレッジ生との異世代間交流もある。学生同士の交流(協調性)と絆、保育者からの学び、豊田が述べているように子どもの幼児理解が深められたこと、人と人とが相互に影響しあい育ち合っていること、また、廃材の再利用など計り知れない学びがある。附属園の保育士や教諭は、子どもたちや学生、エルダーカレッジ生が共有できる、充実した場と時間、空間を提供しているのである。

佐藤、中村、武田(2007)⁶⁾は「ごっこ遊び」において、現場保育者は、子供同士の触れ合いや共同意識が芽生える環境の配慮と興味の連続性に繋がる活動内容を工夫し、教育の価値を模索しながら、独自のカリキュラムを作り出しているとしているが、まさに本学附属園においての「おまつり広場」も、長い歴史と創意工夫を積み重ねてきた行事といえよう。

佐藤らは(2007)⁶⁾「幼児の興味や生活の連続性」は、子どもと直接関わりを持つ保育者自身の意識の中にあ

り、自らの資質や専門性を向上させていくことに結びついているように思われる}としているが、附属認定子ども園は「佐賀県のモデル園」として注目される立場であり、保育者は日々、自己研鑽に努力している。

また、椛島、松村、平山、牧田(2008)⁷⁾らは、「大学が単に学問を探求する場だけではなく人間性の成長の場として機能することが求められ、大学において提供可能な体験は何か吟味しなければならない。さまざまな育成を目指す中で、大学と保育現場を往復することで自己課題を明確にして学習に対する動機付けを高め問題解決能力や思考力を養う」と述べている。また、「実習体験は保育者養成、キャリアデザイン構築両面で重要である」とし、学内施設との連携の重要性とその効果について述べている。

このような観点から、附属保育園が認可を受けて認定子ども園としてスタートした平成19年度より、学外保育所実習前に附属保育園実習を実施して、「保育園とはどんな所=保育園理解」をして学外実習に出ていたが、実習担当者が変わった今年度より、附属保育園での1年生の実習は中止となっている。附属認定子ども園との更なる連携も再確認しなければならない事項であろう。椛島(2008)⁷⁾らは、「乳幼児の実態把握や保育についてより深く学ぶことができるよう課題配列を工夫し、学外実習前に乳幼児の生の姿にできるだけ触れ、少しでも緊張やとまどいのないスタートが切れるよう配慮している」と述べている。

正規の実習では、記述するのに時間を要する実習日誌もあり、そのためには的確なメモをする必要性と実習担当クラスの子どもたちと担任保育者への気配りなど、朝の出勤から退勤まで緊張の連続である。丹羽(2009)⁸⁾(2010)⁹⁾(2011)¹⁰⁾

「おまつり広場」では、「実習担当クラス以外の子どもとの関わりができた」、「実習より楽しく接することができた」、「普段とは違う保育者や子どもたちの姿を見ることができた」、「一日ゆっくりと子どもと触れ合うことができた」、「正規実習ではこうはいかない」、「実習以外で関わるのができたので、正規実習より楽しく接することができました」とし、学生は、正規実習時と「おまつり広場」参加では違う見方や感じ方をしていることが分かった。また、同時に保育者も忙しい中でも普段と違った顔を見せていること、子どもたちの気持ちも違うことや、学生自身も正規実習と比較して余裕をもって「おまつり広場」に参加していたといえる。

香月(2009)¹¹⁾は、「学生たちは実習でも子どもと生で触れ合う機会はあるが、正規実習では指導教員の指導、成績や評価を気にして本来の自分が出せないことが多い」とし、正規実習ではない授業の一環としての行事参加の「おまつり広場」は、評価を気にせず伸び伸びと

楽しい時間と空間の共有ができたからだと思われる。それに平行し、学生自身のゆとりも生まれ、より充実した保育者理解と幼児理解ができたのではないだろうか。学生自身が手ごたえのある体験的学びを実現しているといえる。

テント片付けにおいても(テントは16～19梁ある)は「先生方の手伝いができる」と保育者に思いやりや優しさを持つ学生もいた。「おまつり広場」についての質問では、講義では学べない良い体験が出来たとし、ほぼ全員が肯定的な回答をしていた。学生が「おまつり広場」の参加を通して実際に活動体験することに深い意義があり、学生が保育者として専門的知識と技能を高める絶好の機会といえる。この附属認定子ども園行事「おまつり広場」参加は、保育者養成における教育活動の一つと言っても過言ではない。時代の変遷と共に学生の関わり方も変化すると思うが、この活動は参加の方法を模索しながら継続する価値があるといえる。

6. ま と め

「附属認定子ども園」行事の一大イベントである「おまつり広場」に参加しての、学生の幼児理解や保育士及び教諭理解への教育効果(学び)について、また、正規実習と授業の一環としての行事参加した学生の学びについて比較検討を考察してきた。

教育効果(学び)については、次の3点にまとめた。

- (1) 通常保育とは違った(行事)質の高い保育実践を観察することができた。
- (2) 0歳児から80代までの異世代交流での同じ場、時間、空間、雰囲気共有ができた。
- (3) 正規実習のように評価されない実習(現場体験)で、ゆとりを持って伸び伸びと楽しんで参加したことにより、観察の視点が広がった。

これらのことから、幼児理解や保育者理解の学びがより深められたことが明らかになった。

以上のことを踏まえ、即戦力、実践力をつけさせるためには、実習だけではなく、より豊富で多様な体験の場が必要であり、ボランティアなども含めて、附属園や現場との連携を密にしながら、養成校はより多くの場の提供をしていく努力が必要であると考え。

注1) 表現・音楽コースの「卒業課題研究Ⅱ」の実践の場として毎年開催している。今年は12月11日(日)幼児保育学科実技発表会第39回を実施した。

永原学園 佐賀短期大学紀要第38巻「表現活動の実践力育成に向けての取り組み—実技発表会の開催を通して—」p155—p166

注2) 永原学園 佐賀短期大学紀要 第38巻「保育者を目指す学生と子育て支援—「親子いきいき広場」の

教育効果—」p167-p175

付記1) 本研究において、ご協力を賜りました「附属認定子ども園」の三光幼稚園、三光保育園の職員の皆様に厚くお礼申し上げます。

2) 本研究は、「日本乳幼児教育学会、第21回大会」平成23年12月3日(土)、12月4日(日)で発表したものである。

引用参考文献

- 1) 豊田和子：保育者の専門性の検討と初年次ゼミでのポートフォリオ活用の意義、桜花学園大学保育学部研究紀要第9号、2011、p35-p49
- 2) 小田進一、高橋雅子：付属幼稚園実習の可能性(2)、北海道文教大学研究紀要第33号、2009、P59-P63
- 3) 小田進一：付属幼稚園実習の可能性(3)、北海道文教大学研究紀要第35号、2011、p85-p91
- 4) 松山由美子：保育者養成における「保育実践力」育成のためのカリキュラムの構成と評価、四天王寺大学紀要第46号、2008、p233-p253
- 5) 岡本美智子、東ゆかり：保育者養成校と保育園の交流実践についての一考察、聖心女子専門学校、日本保育学会第55回大会発表論文集、2002、p876-p877
- 6) 佐藤善子、中村亜紗子、武田俊昭：「お店屋さんごっこ」による実践研究 日本式プロジェクトアプローチ、聖和大学論集A・B教育学系第35、2007、p63-p73
- 7) 椛島香代、松村和子、平山許江、牧田薫：保育学科学生の実習体験に関する研究～大学と学内施設との連携のあり方を探る～、文京学院大学総合研究所紀要第9号、2008、p237-p262
- 8) 丹羽ヤエ子：保育実習指導における実習効果の改善に向けた取り組み—実習指導テキスト作成をとおして—、永原学園佐賀短期大学紀要第39巻、2009、p75-p79
- 9) 丹羽ヤエ子：保育実習における保育所評価と学生自己評価に関する考察、永原学園西九州大学短期大学部紀要第40巻、2010、p97-p106
- 10) 丹羽ヤエ子：FD研修「リメディアル教育」の理解と実践についての一考察—実習日誌の記述からみる漢字能力について—、永原学園西九州大学短期大学部紀要第41巻、2011、p69-p77
- 11) 香月欣浩：主体性を伸ばす授業、四條畷学園短期大学紀要、2009、p36-p42
- 12) 濱田尚吾：保育者養成教育における学生参加型地域活動の意義、羽陽学園短期大学紀要第8巻、2010、p437-p444
- 13) 村田暢子、鈴木方子：異年齢保育を支えるもの、名

古屋女子大学、日本保育学会第 61 回大会発表論文集、2008、p672-

14) 仲野悦子、後藤永子：異年齢児保育による子どもの育ち、岐阜聖徳学園大学短期大学部、名古屋女子大学総合科学研究所、日本保育学会第 55 回大会発表論文

集、2002、p228-229

15) 小山優子、白川浩、福井一尊：「ほいくまつり」活動を通じた保育者養成の意義（1）- 学生指導と教員連携の観点から -、島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要第 49 号、2011、p51-p60

